数理解析研究所講究録
第433巻 1981年 105-106

「出版社名」という情報について

東理大　理工　　細井　勉

データベースのなかの書誌情報において，出版社名は，決して軽く扱われてはいないが，かといって，かならずしも，検索時の主要なキーになるものだと思われてはいないであろう。しかし，検索のキーとなり得ることを述べ，問題点をコメントしておきたい。

昔とくらべて大学の教科書水準の単行本がふえてきた今日，すくなくとも実験的な段階では，その種の単行本に関するデータベースも考えられてよいであろう。それは教師が教材を調べるのに役立つだけではなく，学生が参考書を探すのにも，また，学生がIRの経験をつむのにも有効であろう。

一方，学生と話していると，実際に読んだ本を説明するのに，本の形態，表紙の色，出版社名などは同定できても，著者名を同定できない場合が多い。このことは，教師でさえも絶対にありえないこととはいいきれない。

そこで，出版社名や，表紙の色がキーとして指定される場合が生じる。

出版社名に関しては，図書カードの作成法などで，あいまいでない同定法が用意されていることであろうが，一応，つぎの2点について注意をうながしておきたい。

1．名称のとり方，略記法などについての標準化。

2．社名の変遷についての知識のとりまとめ．

学生に頼んで，図書カードをもとにして，出版社別の蔵書数を調査してもらったとき，すくなくとも，つぎのようなミスが観察された。

(i) Springer，Springer-Verlag を別扱いした。

(ii) Wiley，John Wiley & Sons，Wiley Inter-science を別扱いした。

こまかく調べれば，この種のミスはもっと見つかると思われる。この種のことは専門家には自明のことであろうが，検索を学生などにさせるとしたときには問題となろう。

単行本はかなりに少数の出版社に集中しているので，問題の解決はちょっとの作業で終ると思われる。したがって，今から対策を考えておくほどの問題ではないと思うが，一応，問題の存在について，コメントだけしておきたい。